

『オランダ・ベルギー紀行～ブルージュの鐘を心に響かせたい！』

“フラワーカーペットと運河まつりにご案内～オランダ・ベルギー7日間”

〔クラブツーリズム おひとり参加の旅〕

出発 平成 20 年 8 月 13 日 (水)

帰国 平成 20 年 8 月 19 日 (火)

添乗員 (TD) : 溝渕 喜美子さん

松田聖子 6 枚目のオリジナルアルバム『Candy』の中に、「ブルージュの鐘」(作詞：松本 隆／作曲：細野晴臣)という歌があった。このアルバムは昭和 57 年秋の発売で、当時、卒業したての新米歯科医だった僕は、中世の幻想的な雰囲気イメージさせてくれるこの歌を聴いて想ったものである…。 “ワッフルの朝食なんて、おしゃれ～” “ブルージュって一体どこにあるのだろう？ 行ってみたい…”

そんな想いを抱いて 26 年、いよいよベルギーを訪れることになった。ブルージュの鐘は、‘Ding Dong Ding Dong’ と心地よい音色を響かせてくれるだろうか？ そう言えば、『Candy』『ユートピア』『Canary』の頃の聖子は歌も良かったし、可愛くて、大好きだったなあ～(*^^)v

平成 20 年 8 月 13 日 (火) 東京 曇り、アムステルダム 晴れ

9 時 25 分日暮里発のスカイライナー13 号に乗り、第 1 ターミナルの G25 カウンターには 10 時半に到着した。今回の TD (ツアー・ディレクター) は、以前の奈良・京都のひとり旅ツアーでお世話になった溝渕さんであり、また、ひとり参加限定の旅ということで、団体の中で独りぼっちになったらやだなあ、という心細さも無くて気が楽であった。しかし、今回は 22 名のメンバーで男は僕ひとりで、浮いたらどうしようという戸惑いと、将に “ハーレム状態” (by 溝渕さん) のワクワク・ドキドキ感とで、出発前から少し落ち着かなかった。



『Candy』



BA 8 便で行きました イチゴとリンゴのジュース



他の会社のツアーには一人旅応援・大歓迎とかいうのもあるが、‘おひとり様限定’というプランを断行しているクラブツーリズムには “Good job!” と讃えてあげたい思いであるーでも人が集まらなくて催行できないツアーも多くて大変だろうなあー。

12 時を過ぎると小腹がすいてきたので、ラーメンを食べてからの搭乗となった。後でツアーのメンバーから“鹿島さん、ラーメン食べてたでしょ？”って言われたが、たった 1 名の男ということで注目されていたのかも！

BA8 便は定時（13:20）を少し遅れての Take off となった。座席の読書灯が壊れていたの、最後尾の搭乗クルー席に座って（もちろん許可を得て）、2 時間ほど「地球の歩き方」等を読んだり、また、機内映画で「ハリー・ポッター 炎のゴブレット」を見たりして過ごした。

ロンドンが近くなると何度も旋回を繰り返し、明らかに時間稼ぎをしているようで、ヒースロー空港が混雑していることが窺われた。旋回のたびに機体が激しく揺れたため飛行機酔いを起こして苦しくなってしまったが、プラミールを服用して何とかしのぎ、ロンドン時間 17 時 35 分に着陸となった。曇り、18℃であった。

トランジットの際、ベルギーのアントワープから日本に旅行していたという若い二人連れ（夫婦？）から声を掛けられた。彼らは大量のリポビタミンDを持っていて、荷物検査の液体チェックでいろいろ言われていたが、ダメだったら少しシェアしてくれないかということだった。ジャスト 100ml だったので何とかクリアできたのだが、彼のお父さんがリポD大好きで、ベルギーだと 1 本 1 ユーロ（¥170）もするが、日本だと安いのでお土産にしたということであった。後で溝渕さんが、あのリポDについて‘鹿島さんのかと思った!!’などと KY なことを言っていたが、いくらハーレム状態といっても…(^^ゞ。

彼らは 7 週間もの夏休みのうち、1 か月近く掛けて東京とその近郊を回り、京都・大阪にも足を延ばしたとのこと。そこで京都について一寺社や庭園、古い町並み等に一話が弾み、日本らしくて良かっただろう？と尋ねたところ…、暑くて、昼間はほとんどホテルから出られなかったという！事前に京都案内のプロモーションビデオを見てきたが、ビルが多くて古都の雰囲気・趣きに欠けているとの応えだった。日本の都市計画は行き当たりばったりで、長期的な視野が無いから外国人から見て奇異に感じられるのだろう。

20 時発のアムステルダム行きを待つ間、イチゴとリンゴのジュースを飲んだところ、とても美味しかった。しかし、日本円に換算すると¥400 以上にもなりびっくりしてしまった。Too expensive!

アムステルダム行き BA444 便は定刻を 30 分遅れの 20 時 30 分に離陸し、22 時 25 分に到着となった。小雨で 16℃。ちょっと肌寒く感じた。

空港からはラマンさんの運転で、23 時ジャストにバスが出発となり、一路ホテルに向かった。走り出すとすぐに、アシスタントの古川さんというおじさんから滞在中の注意事項をきかされた。1) 盗難にはくれぐれも注意する。2) ホテルの部屋も危ないのでスーツケースには施錠を！3) ルーマニア系のスリ

が多いので、特に人混みでは注意する。4) 水道水を飲んで OK。5) チップは基本的に無し。6) 枕銭も必要無し。7) 天気が変わりやすいので、雨具は必携。8) 日本までの郵便（絵葉書）は 92 セント。

続いて、オランダは人口 1,600 万人、九州くらいの面積で、樺太と同じくらいの緯度であり、今頃の日中の最高気温は 20℃前後、立憲君主国家である、といった説明があり、結局 10 分ほどでホテルに到着となった。

8 月 14 日（木） 曇り、小雨、晴れ

6 時半のモーニングコールは鳴らなかったが（TD の部屋以外全室忘れられたとのこと）、15 分前には目覚めていた。

8 時にバスが出発すると、TD よりイヤホンガイドについての説明があり、紛失すると 8,500 円の弁償費用がとられるという脅迫めいた言葉も付け加えられた(T_T)。



黄色い電車と並走して進んだ



自転車専用道路には注意！

30 分ほどでバスは停車し、こちらに来て 35 年になるという現地ガイドの田村さんというお姉様から、まずは自転車専用レーンを走る自転車の危険性についての説明があると、ほどなくして美術館広場に到着した。3 つの美術館に囲まれているのでこの名前があるといい、涼しげな池は冬になると子供用のスケート場になるということである。



花を飾ったきれいな家



冬になるとスケート場になるという コン서트ヘボウ



9 時のオープンを待って国立ミュージアムに入場した。1885 年開館というだけあって、歴史を感じさせる、風格ある見事な建物である。あたかも国王の宮

殿のようなレンガ造りで、その佇まいを眺めているだけでも、美術大国の持つ独特な風格に圧倒されるといった感じであった。しかし、2003 年より改装中であり、現在は代表的なものだけを展示中ということで、工事は 2013 年に完成という話であった（全部は見切れないので、僕の場合代表作品で十分です(^^♪~)。



国立ミュージアムは格調高い雰囲気のある建築が印象的であった

内部に入ると、まずは、ファン・デル・ヘルストのスペインとの間の 80 年戦争で、12 年間の停戦協定が結ばれた（1609 年）際の喜びを描いたという絵が目に入った。階段を上がって右手には、島根県からという 14 世紀の木造作品が展示されているのをチラッと見た。本博物館の代表的な展示に混じっての、異国で見る和の文化は非常に趣き深く感じた（写真が撮れなくて残念）。



内部は撮影禁止なので、外観しか撮れません

オランダの絵画は 17 世紀の作品が中心という。16 世紀の半ばにプロテスタントが入ってきてから宗教画が無くなり、肖像画や風景画が多くなったそうだが、これが画家にとって良い収入になって、創作意欲をかきたてた結果なのであろうか。17 世紀のオランダは黄金時代といわれる好景気に沸いてブルジョア層が誕生したが、彼らが富の象徴として自分や家族の肖像画を依頼したことが、絵画の隆盛につながったことが推測される。また、モデルを理想化したレンブラント以前の作品から、ありのままに描く手法は、近代絵画の先駆けとなったことは間違いない。

風俗画家として当時有名であったフランク・ハルツの絵では、アザミは愛情、樫の木は男の強さ、それに巻きついているツタは女の愛情という説明があった。

続いて、レンブラントの作品に進んだ。生涯に 50~60 枚ともいわれる自画像

を描いた彼の青年期（22 歳時）の「自画像」の前では、自らの画風を研究するために自画像を描いたのだと、田村さんが力強く語ってくれた。また、「預言者アンナ」のモデルはレンブラントの母親であり、ヘブライ語で書かれた聖書に置いた手の深い皺が印象的であった。また、裕福な 20 歳の令嬢の画は最初の妻サスキアを描いているという。



「アムステルダム布地ギルドの見本監査官達」「ユダヤの花嫁」と、「マリア・トリップ」

後期の作品である「ユダヤの花嫁」は絵具の厚みをうまく使っているが、この付着法は未だ解明されていないとのことである。この絵の右側は夭折した息子さん、左側は 55 歳時の自画像で、左の壁には「アムステルダム布地ギルドの見本監査官達」が掲げられていたが、事務所の暖炉の上に掛け、高い位置において鑑賞するように描かれたのだという。

また、オランダは山が無いので雲の動きが早く、風景画にも雲の動きや太陽の光を強調して描かれることが多いということも説明された。

フェルメールは 43 歳の短い生涯で、しかもペースがゆっくりだったため全世界で 30 数点しか現存しておらず、32～36 点説等がささやかれているという（しかし実際には 43～45 点くらいの作品を残したといわれている）。手前のタイルが強調されている「恋文」は、‘楽器を弾く＝恋を奏でる’といったイメージをつかむことができた。また、「牛乳を注ぐ女」は窓を通して差し込む柔らかな光が、全体的にまろやかな印象を与えてくれ、静寂の中に、流れ出ているミルクの音が永遠の時を刻んでいるように感じられた。



「牛乳を注ぐ女」と世界 3 大名画の一つ「夜警」

最後がレンブラントの「夜警」である。アムステルダムの自警団は敵がいなくなったので社交集団になってしまっていたが、それを描いたということであ

る。中央後ろのヘルメットを被っているのがレンブラントで、左下の紅一点が最初の妻サスキアということである。この絵には警備員がいて、しっかり見張られていたが、それだけ名画ということだろうか。

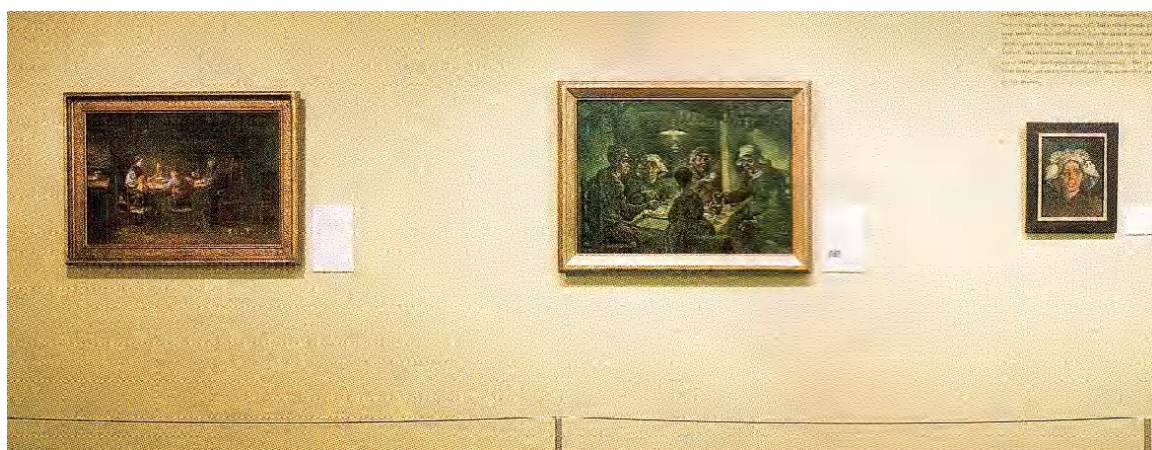


ゴッホ博物館は混み合っていた

1 時間ほどの見学の後、ゴッホ美術館に向かった。ポスト印象派の代表的な画家であるゴッホについては、数年前にオーベル・シュル・オワーズを訪れて、作品にある教会や麦畑、ゴッホ兄弟の墓を見たことが思い出された。

ここにはゴッホの弟テオの遺族の希望で、作品が散逸することのないよう、テオの元にあった作品がまとめて公開されている。ゴッホは 27 歳で油絵を始め、1890 年に 36 歳で夭折したが、その間に描かれた 200 点以上の油彩画がここに集めている。

1973 年の建造だが、1999 年に、かの黒川紀章設計によって新館が建てられたというが、その奇抜な形は、地元ではちょっと不評とのこと。



中央が「馬鈴薯を食べる人々」（オランダ時代の暗い絵）

ゴッホ美術館は、画家のスタートを切ったオランダ時代から、フランスのパリ～アルル～サン・レミ～オーベル・シュル・オワーズ時代というように時系列で展示紹介されている。

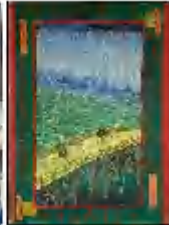
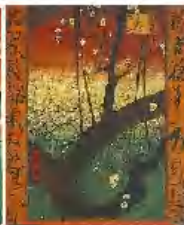
オランダ時代の「ニューネンの古い教会の塔」は人の命と宗教のはかなさを感じられる絵であり、「ニューネンの牧師館」や「馬鈴薯を食べる人々」等、牧師であった父との葛藤のせいなのか、暗い作品が多い。



「開かれた聖書のある静物」

パリ時代の作品はジャポニズムの影響！

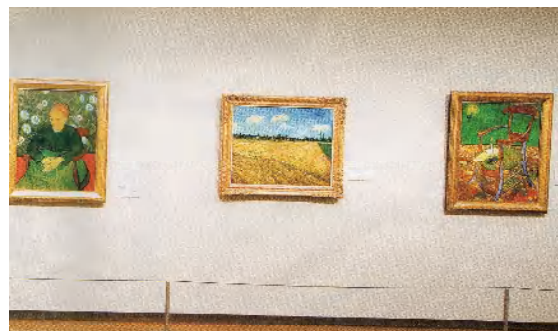
パリ時代になると印象派の影響を受けて急に明るい絵に変わっている。もちろん、浮世絵の影響も大きく、歌川広重の模写「花咲く梅の木」や「雨の大橋」も展示されていた。歌川広重の木版画の模写は明るいタッチで、ゴッホの転換期であることが窺われた。また、「果物の静物画」も素晴らしかった。



それぞれ左が広重で右がゴッホ

「黄色い家」

ゴッホの代表作と呼ばれる作品が多いのがアルル時代である。浮世絵の影響がみられる「黄色い家」や「寝室」。つまらなそうな顔をして子守りをしている母性の象徴「ルーラン婦人」、そして鮮やかな色彩と勢いのある筆致で描かれた「ひまわり」は、うつろい易い美を速く描けたことに満足している自信作のように思われ、しばし視線が釘づけになってしまった。「ゴーギャンの椅子」の椅子に置かれたた 2 冊の本やろうそくは、現実と空想、幻想を表していることが理解できるようであった。



左から「寝室」「収穫」「ひまわり」「ルーランの夫人」「耕された畑」「ゴーギャンの椅子」

アルルではゴーギャンとの共同生活を営むも、不和になって、彼から「自画像の耳の形がおかしい」と指摘されるや、自らの左の耳朶を切り取って女友達に送り付ける等の奇行が目立ち始めたという。そのため自ら精神病院に入院し

たのが、サン・レミ時代である。弟テオの子供の誕生を祝い、甥にプレゼントするために作成した「花咲くアーモンドの花」は鮮やかな青が印象的であった。



「花咲くアーモンドの花」



入院療養した「サン・レミの療養院の庭」

ゴッホが晩年を過ごしたオーベル・シュル・オワーズは、数年前に実際に訪れているので何となく懐かしい、ホッとする感じを持った。特に「麦畑」や「カラスのいる麦畑」の、田舎には人を元気づける力があると信じていたゴッホの、自然界に対する態度や喜びが感じられる力強いタッチが伝わり、心が癒された。



「麦畑」や「カラスと麦畑」には癒しを感じた

ゴッホ美術館での鑑賞もあっという間に終了し、11時20分に集合してバスに戻り、アムステルダム市内を巡る様に、一路ダイヤモンド工房に向かった。



振り返ると国立ミュージアムとゴッホ博物館、トラムと雲の動きもこの街らしい

アムステルダムは人口74万人で、オランダ最大の商業の街で、全体的にこじんまりしており、17世紀に最も繁栄したという。国会等の行政機関はハーグにあって、都市機能を分散させているそう。165もある運河の全長は100kmにも及び、アムステル川のみが唯一天然の川で、13世紀にダムでこの川を堰き止めて造ったことに由来してアムステルダムと命名されたという。

オランダを代表するビール・ハイネケンの旧本社ビルの所を左折して、18世

紀に造られた比較的新しい運河の橋を渡って、ダムラックを駅方向に進むと右手がアムステル川で、少し進むと、左手に王宮、戦没者の慰霊の塔が見られた。この辺りが街のヘソ・中心地になっているダム広場である。ここは 1960～70 年代に世界中のヒッピーのたまり場となっていたということである。



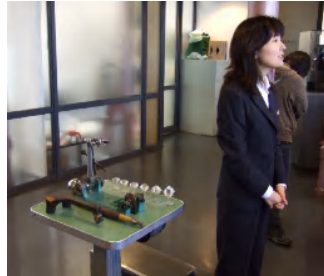
運河を渡り、ダムラックを進むと右手はアムステル川



ダム広場の戦没者慰霊塔と王宮、アムステルダム駅の周辺は地下鉄の工事中であった

1889 年に完成したアムステルダム中央駅をモデルに東京駅が造られたというように、“将に東京駅”が目の前に現れたが、時計の他に風向計が掲げられているのがこの国らしく思えた。また、ここでも公共事業が盛んなようで、周辺は地下鉄工事のためにごった返していた。駅周辺は、かつて湖であった所を、まず3つの島を造ってから埋め立てて、最終的に駅を建造したという話であった。

11 時 55 分にユダヤ人地区にあるダイヤモンド工房に到着した。南アフリカは以前オランダの植民地であり、そこで採掘されたダイヤモンドがオランダに移送された後に研磨を施されたことから、多くのダイヤモンド工房があるという。



GASSAN ダイヤモンド工房とおねえさんの説明と研磨の実演風景

この工房は世界最初の 121 面体カット（GASSAN121）という特許が売りということであったが、貴金属関係に全く疎いので、馬耳東風状況であった。



セールストークに熱心に聞き入る女性陣をよそに、おねえさんとツーショット撮影！

再びバスに揺られ、運河を眺めながらアムステルダムの市街地を巡り、昼食のパンケーキの店に向かった。



有名なパンケーキ・ベーカリーは楽しみにしていた！

バスを降りてプリンセン運河に沿った道を進み、アンネの家の前を通過し、小さなユリ運河を越えてパンケーキ・ベーカリーに到着した。直径 30cm もあろうかという巨大なパンケーキにはハムが入っていて、そのまま食べると少ししょっぱかった。これに黒砂糖風味のメープルシロップ？をかけて食べるのだが、大きさと単調な味は途中で飽きてしまう程であった。このパンケーキは量が少なめなので、朝食はしっかり食べてくださいと TD の指示があったのだが、溝渕さんの胃って一体…(^^ゞ



細長い店内と厨房

巨大なパンケーキとシロップ

14 時半になって店を出て、運河を渡る爽やかな涼風を受けながら、アンネの家に入場するための長い行列に並んだ。対岸はヨルダン地区といって、元は労働者の町、下町であったということだが、ヨルダンというのはフランス語の「ジャルダン（庭）」が訛ったものと言われている。

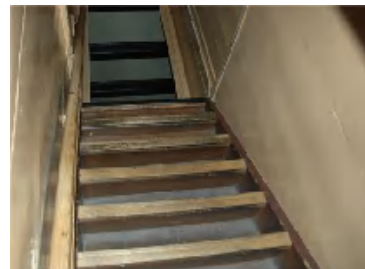
15 時過ぎに中に入ることができたが、間口が狭くて奥行があつて、奥は倉庫になっているというこの建物は、この辺りでよく見られる造りということであ

った。ユダヤ人であったアンネ一家は、ドイツからアムステルダムに移り住み、父親はジャムや香辛料の材料商をしていたという。



アンネの家の後方には西教会が美しく聳えている

うちの母親と同じ 1929 年（昭和 4 年）生まれのアンネ・フランクは 1944 年 8 月に捕まってしまう、アウシュビッツに 2 か月ほど収容された後に、ベルゲン・ベルゼン収容所に移され、そこでチフスで亡くなったという。享年は 15 歳。



コマネチに似ている！？

本棚を回転すると秘密の階段が出現する

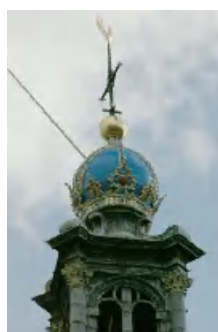
戦争に対する種々の感慨が浮かんできて、複雑な気持ちになった。また、小さな窓から見える夜空と西教会の尖塔は、彼女の心を少しは慰めたことであろう思われた。小説家志望という彼女の部屋には女優のブロマイド等が飾られていたのが印象的であった。隣の部屋は歯科医が潜伏していたというが、アンネと仲が悪くてケンカばかりしていたという…。



西教会の脇にあるアンネの銅像と美しい西教会の尖塔

1691 年に建てられた西教会は 85m の尖塔を有し、この街随一の高さを誇っている。アムステルダムは地盤が弱いため、下部はレンガ造りだが、上部は木の周囲に鉛を貼り付けて重量を軽減させるといった工夫がなされているそうだ。

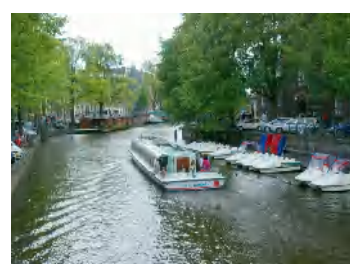
尖塔の王冠は 15 世紀にこの地を治めていたオーストリア皇帝マクシミリアン 1 世を記念しており、×が縦に 3 つ並んでいるマークはアムステルダム市の紋章であるという。



アムステルダム市の紋章と尖塔の王冠

街灯の上にも王冠が！

残念ながら、西教会はミサか何かをやっているために入場できなかったが、プロテスタントの教会のため、内部はシンプルな造りであるということであった。時間潰しに近くのスーパーに入ったが、特に買うべきものは見つからなかった。



東京駅のモデルとなった中央駅近くから出発

トラムに乗車して移動し、いよいよアムステルダム名物・運河クルーズのスタートとなった。アムステルダム中央駅に程近い発着場から出発した。まずはアムステルダム港に入ったが、年間 4 千隻もの船が往来し、潮の干満の影響が無いので安全ということである。因みに、海運国家オランダには世界有数の港が多いが、ロッテルダムは年間 3 万隻にもなり、これは世界一とのことであった。



自称カメラおばさんとのツーショット



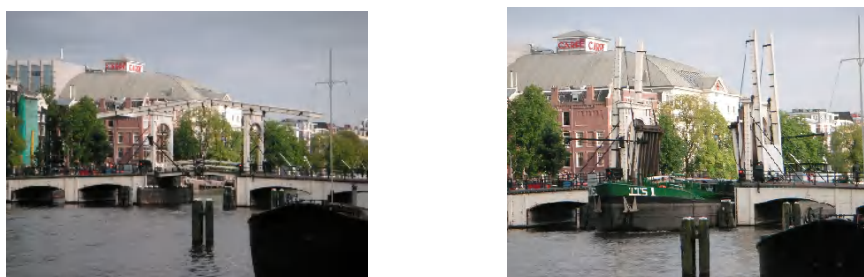
科学技術センター

関西空港を設計したピアゾ氏の設計である科学技術センターは、その格好から日本の船の科学館を彷彿させた。運河に入っていく、少し進むと 16 世紀初頭

に造られた城壁の見張り台であったモンテルバーンの塔が見えてきた。時計台は、17 世紀になってヘンドリック・カイザーという建築家によって取り付けられたという。市庁舎を左に見て左折しアムステル川に入ってミュージックシアターを過ぎると、すぐにマヘレのハネ橋が目に入ってきた。17 世紀に造られた木製のハネ橋で、マヘレ=ほっそりしたという意味だが、近くに住んでいたマヘレ姉妹に因んだという説もあるそうだ。

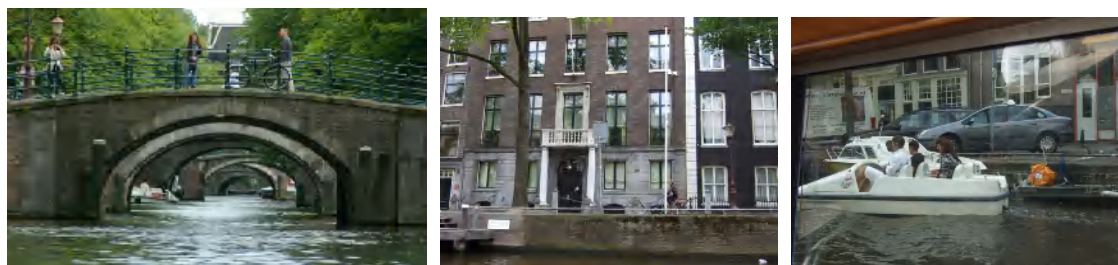


モンテルバーンの塔と小さなハネ橋そして有名なマヘレのハネ橋



船の通過に伴ってマヘレのハネ橋が上がった状態

右折してヘーレン運河に進み、レギュレリエス運河と交差する処を眺めると七つの橋が一直線に並んで見え、美しい光景であった。ヘーレン運河がカーブしているところはゴールデンカーブと呼ばれ、17 世紀の豪商や公的機関の理事等が住んでいたという間口が広い家々が続いた。市長官邸のバルコニーが印象的であった。左折して 3 つの運河（ヘーレン、カイゼル、プリンセン）と交差しているライツェン運河に入った。



七つの橋の重なりは美しかった アムステルダム市長の官邸 小さな舟も走っていた

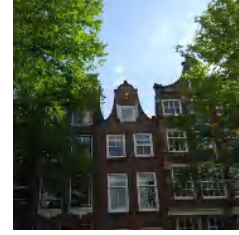
各運河にはボートハウスと呼ばれる実際に人が居住している船が停泊しており、水道や電気、それにガスもほとんど引かれているという話であった。現在は 2500 隻くらいあって、これ以上は増やさないようにしているとのことである。



西教会が見えてきた



アンネの家はまだ行列 家具を持ち上げる腕木つき



また、この辺りの住居の階段は狭くて急なため、家の上の部分に家具を階上に引き上げるための腕木という出っ張りが付けられているのも確認できた。

少し進むと西教会が見えてきて、先ほど並んだアンネの家の前を通過したが、行列はまだまだ続いていた。右折してユリ運河に入り、カイゼル運河を進んでブルワーズ運河（この付近にビールの醸造業者が多かったことから命名された）に入ってから水門を抜けた。



16 時 50 分、約 1 時間のクルーズを終え、再び中央駅近くの船着場に戻ってきたが、天気も良くて湿気が少なく、心地よいクルージングであった。

トラムに乗ってダム広場に進み自由行動となったが、田村さんの後について周囲の散策に向かった。先週末はゲイの世界大会が開かれて、アムステルダムは大混雑したという。市長自ら先頭に立ったパレードも行われて、大いに盛り上がったそう（因みに市長はゲイではないとのこと）。

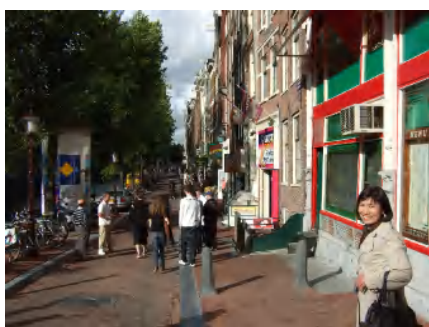


中央駅付近から見た聖ニコラス教会 ダム広場や王宮付近は夕刻になって賑わってきた

現在は迎賓館となっている王宮は、17 世紀に市庁舎として建造されたが、フランス侵攻時代にナポレオンの弟ルイ・ボナパルテが王宮として接收し、返還後に市がオランダ王家に献上したということである。田村さんに連れられて名物‘飾り窓’を見に行ったが、時間が早いため、多くの店はまだ開店前であった。ポルノショップや映画館等がひしめく中、たくさんの飾り窓を発見したが、開店している（カーテンが開いている）店の窓には、セクシーな下着姿の

おねえさんたちが誘惑しているのを見ることができた（No picture というこ
とで残念！）昔は彼女たちで組合を作るなど、港街の女としての誇りを持って職
業に従事していたという。しかし現在は、マフィア等が暗躍して東欧や南米辺
りから連れて来られる女性が多く、パスポートを取られて吸い上げられたりし
て、ずいぶん様変わりしているという。若くてきれいな子だけでなく、ふっく
らした中年のおばさんもあるという話であった。ちょうど事を終え、飾り窓嬢
に見送られて店を出てくる若者にも遭遇したが…!(^^)!

田村さんはオランダに来て 35 年、ご主人はオランダ人という。馴れ初めを聞
いてみると、旅行会社に勤めていた彼女はオーストラリアにいて、その時に知
り合ったということであった。オーギーでなく、ダッチマンとねえ…。



田村さんに連れられて飾り窓や旧教会がある辺りを散策した

途中、コロケの自販機があり、グループの中で買い食いしていた人がいた
が、18 時 40 分にダム広場に戻り、またまたトラムに乗って中央駅付近のレス
トランでの夕食となった。



ブタ肉のソース掛けと大量のフレンチフライ イチゴのムースはデリシャスだった
バスに乗ると 20 分程でホテルに到着し、早めに就寝した（22 時 30 分）。

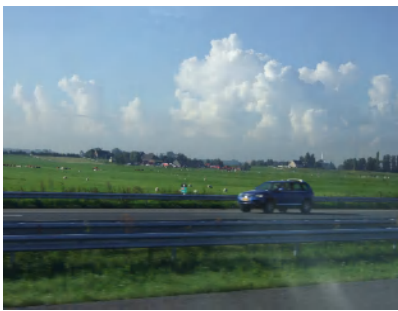
8 月 14 日（金） 晴れ

8 時 45 分に出発、ドライバーはベルギーから来たフィリップさんとなった。
スキポール空港はロンドン、フランクフルト、パリに次いで大きいヨーロッパ
第 4 の空港であることや、免税の手続き、自動車のナンバープレート、さらに、
今年 70 歳になったベアトリックス女王の誕生日（4 月 30 日）は祝日になって
いて、彼女の宮殿もハーグにある等について TD から説明があった—4 月 30 日

というのは、実は先代女王の誕生日であるのだが…。

9時25分にハーグに到着して国会議事堂でバスを降りると、先回りしていたのか、現地ガイドの田村さんが迎えてくれた。オランダ第3の都市であるハーグは人口50万人、国会や各省庁、各国の大使館をはじめ小和田恒氏が判事を務める国際司法裁判所も置かれていることで有名な政治の中心地である。

13世紀にホラント伯爵が建てた狩猟の館から始まり、これを中心に13世紀以来の建物が国会議事堂や総理府、外務省等を形成してビネンホフと呼ばれる。下車した広場には、オランダ建国の父であるウィリアム1世の銅像が青い空に美しく輝いていた。



ハーグへ向かう道沿いには酪農風景が 銅像のすぐ右のギザギザ屋根は監獄博物館

ビネンホフに足を踏み入れると、正面に国会開会式が行われる騎士の館が目に入り、周囲には歴史の重みを感じるレンガ造りの中世風の建物が並んでいた。19世紀に建てられた左手の建物が上院議院（参議院）で定員は75名、右手が17世紀の下院（衆議院）の建物で定員は150名という説明があったが、オランダは九州位の大きさなので、このくらいで十分なのであろう。日本ももっと少なくてもいいよね。特に参院は(^^♪～。



騎士の館



中世を思わせる建築様式



首相官邸

騎士の館は前から見ると教会風だが、横から見ると普通の洋館のような造りになっていた。ビネンホフを抜けるとマウリッツハイス美術館だが、その手前にトランチェという首相の執務室があつて高級なBMW（7シリーズ？）が止まっていた。田村さんが、北京（オリンピックの開会式）から帰ってきて執務を始めたのでは、と説明してくれたが、暑い北京からこのような涼しい処に戻るとホッとするだろうなあと思った。

今日 8 月 15 日は日本では「終戦記念日」だが、オランダでは「解放記念日」になっており、美術館には国旗が掲げられていた。特にハーグはインドネシア系の人が多いので、この日を意識して多くの国旗が掲げられるということであった。

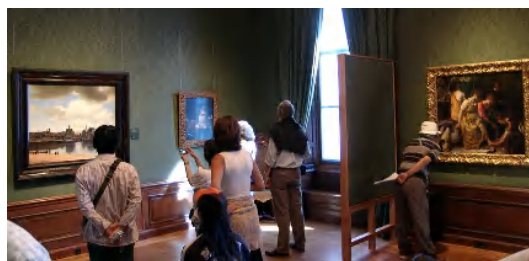
10 時を回って、いよいよマウリッツハイズ美術館の見学となった。17 世紀にオランダ領ブラジルの総督を務めたヨーハン・マウリッツの私邸として建てられた、オランダ古典様式の建築物である。



ホフフェイファの池越しに見るビネンホフ マウリッツハイズ美術館の外と入口の絵

美術館の外の垂れ幕と、中に入ったところの絵が「真珠の耳飾りの少女」であり、嬉しくなりました。

召使の入口だった入場口から入り、まずはレンブラントの作品から鑑賞した。「テュルプ博士の解剖学講義」は 1632 年に行われたアムステルダム外科組合主任解剖官ニコラス・テュルプ博士の公開解剖講義を描いたもので、彼の名声を確立した作品と言われている。医学生たちの熱心な視線は写実的であるが、内臓ではなく、神から授かった身体の中で最も精巧な器官のひとつである腕の筋肉を解剖しているところに、芸術作品を描くという目論見、意図を感じた。また、63 歳時の「自画像」は、左右の目の濃淡の違いを直近で見ることで、光と影の魔術師レンブラントを実感できるような作品であった。



「テュルプ博士の解剖学講義」 「自画像」 至近距離で見ることができて感激！

続いて、牛や馬等を専門的に描いたというパウルス・ポッテルの「雄牛」を見た。ナポレオンによってフランスに持ち去られた絵画の中で、最初にオランダに返還された絵として有名ということであった。

いよいよ「真珠の耳飾りの少女」の鑑賞となった。誰かに気付いた少女が振り返った一瞬を捉えようとした作品で、この少女が誰なのかは不明だが、フェルメールの娘マリアではないかと言われている。目や唇が動きだしそうなくらい生き生きとしており、視線は誰にでも向けられているような感じになっている。また、ターバンの鮮やかな青色が、少女の顔を悲しげにしているようにも感じられたが、それほどに青色の印象が強いのだろう。この青は、当時、金よりも高価であったウルトラマリンを使用しているということで、これは白を加えて明るめに、黒を加えて暗めにしたということである。



「真珠の耳飾りの少女」



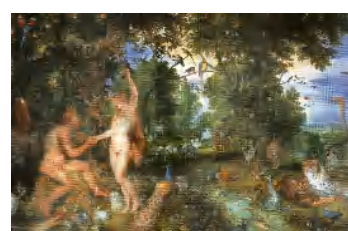
「デルフトの眺望」



「聖母被昇天」

「デルフトの眺望」は光の詩人フェルメールの光を最大に発揮した作品であり、以前は最も人気が高かったという。雲と、その中から出てくる光が見え、にわか雨が降った後の、初夏の早朝の光を表している。人を描くことで生活感のある町を演出しており、静かな佇まいが感じられる。彼の作品のほとんどが室内に立つ女性を描いているので、都市景観画である「デルフトの眺望」は異例な作品と言えよう。

さらに、17世紀オランダ風俗画家のヤン・ステーンの「大人が歌えば子どもが笛吹く」を見た。善行であれ悪行であれ、子供は親を真似るものだという躰について啓蒙しているという。



左からステーン、ヘクト、ルーベンスとブリューゲルの合作、ヘームの作品

アレキサンダー大王の話を描いたヴァン・ヘクトは、パトロンがルーベンスと一緒にあり、この絵の中で、画家といい仲になってしまったアレキサンダー大王の恋人を、ご褒美としてその画家のあげてしまった逸話があるとの説明があった。

ルーベンスとブリューゲルの合作の「アダムとイブのエデンの園」は初めに、

馬とヘビをルーベンスが描いて、その後にブリューゲルが空、木、動物たちを描いていったということである。

ヘームの花を描いた静物画には、毛虫や蝶、盛りを過ぎた花が描かれていて、生命の虚しさを表しているという。どんな生命体も滅びるので、精神を高めることが必要ということにつながるそうだ。

オランダの美術館はガラスケースなどに納まっている訳でもなく、わずか 20～30 cmの至近距離で、思いのゆくまま鑑賞できることが素晴らしいと感じた。特に、北のモナリザとも称されるフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」は、開館直後の空いている時間帯であったため、少しの間、僕の一人占めにすることができて、とても満足であった。

11 時 10 分に集合して、5 分くらい歩いてハーグ森林公園の脇に止めてあるバスに乗り、70 ほどの公園を有する緑の街ハーグを走った。バスからは少し茶色くなりつつあるマロニエの樹が多くみられ、秋の訪れを感じさせてくれた。

オランダ王国が独立した年から命名された 1813 年広場を過ぎると、国際司法裁判所（平和宮）はすぐであった。カーネギーの寄付により 1913 年に完成した建物で、内部には各国から寄贈された装飾品が飾られているとのこと。日本からは西陣織の壁掛けだそうだ。門の前にはゼラニウムが美しく咲いていて、ここでお別れする田村さんとツーショットを撮った。



平和宮でピース



スヘーフェニンゲンのクールハウスと子供用バス？



ハーグの郊外、北海沿岸にあるスヘーフェニンゲンには、戦時中多くのドイツ人スパイが入り込んでいたが、‘スヘーフェニンゲン’と言わせるとドイツ人がうまく発音できないことから、スパイ摘発のために使われたという。現在では、この地は海のリゾートとなっていて、クールハウスというお城のようなホテルが鎮座しているが、古くは森鴎外をはじめ、日本からも有名人が宿泊するそうだ。

海岸に臨むレストランで、クロケット(コロッケ)、ニシン、飲むプリン of 昼食となった。ベルギーのチェリービールを飲んだが、甘ったるくてダメだった。クロケットはそこそこ美味しかったが、ニシンは食べづらかった。このレストランには、われわれが一番乗りであったが、その後、日本旅行や外国人グループらがやって来て、うるさい程にぎやかになった。



レストランの風景とクロケットとニシン料理

浜辺を走って海岸で貝殻を拾ってきたが、北海の水に触れたのは、セントアンドリュース以来だなあと、もう 12 年前にもなってしまうスコットランド旅行を、ふと思い出した。



少し涼しかったので、海水浴客はまばらだったが、爽やかだった

貝殻

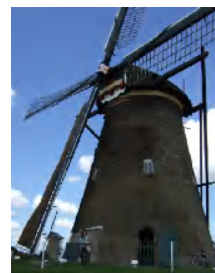
13 時 30 分に出発して、バスの中はお昼寝タイムとなった。45 分位たって、TD よりロッテルダム付近を走っているという案内がチョコッとあり、1 時間程するとロッテルダムの南東約 10 キロにあるキンデルダイクについての説明が始まった。現在オランダには約 1000 基の風車が残っているが、ここには 1740 年頃に造られた 19 基もがまとまって残されていることで、1997 年に世界遺産登録になったそう。風車の機能は排水と粉ひきといったものだが、4 つのハネによるメッセージがあってハネが十の形で止まっているとお休み。×だと休業中。×をちょっと過ぎた感じだとお祝い事で、ハネにリボンや花等をつけて、子供の誕生や結婚等を知らせるメッセージにするそう。そういった説明が終わったところで、キンデルダイクの風車群に到着した。



3.5 ユーロの入場料で風車内部にも入ることができ、そこでの生活様式が窺えた

のどかな風景の中にいくつもの風車が運河沿いに並んでいる様は、まるでおとぎの世界に足を踏み入れたようであった。でもハネが動いておらず、明日、土曜の午後だったら回っているというので、とても残念だった。風車内部にも

入ったが、3階までで、その上は金網がかかっていて閉鎖されていて、風車小屋の上からの風景を望むことはできなかった。



風車が回っていたら、さぞかし圧巻だったことであろう！

早足で歩いてバスに戻ったが、陽が射すと少し暑いけれど、翳るとちょっと寒いくらいの陽気で、運河を渡る風がものすごく気持ち良かった・



運河めぐりのボートも運行していた

15時30分に出発して10分程すると、各人の自己紹介が始まった。首都圏の方が多かったが、関西からも2名参加していた。今回の旅行について、松田聖子の「ブルージュの鐘」を聴いて以来、いつかは訪れたいと思っていたと、僕は話したが、この歌を知ってる方がいてホッとした…。

1時間くらい走ると国境を越え、ベルギーに入った。19世紀にオランダから独立した立憲君主国で、現国王はアルベール2世、ブリュッセルにはEUの本部が置かれている等々の説明がTDからあった。



ブタがジャンプしていなく姿の雲

ペガサスというより麒麟のような形の雲

ぼんやりと車窓から空を見上げると、おかしな形の雲がいくつか見られたので、あわててシャッターを切った。何となくワクワクしてしまう、アニメーションのような光景であった。

いよいよ憧れのブルージュに到着すると、“運河沿いのかわいらしいホテル”ではなく、ザンド広場に面したパークホテルにチェックインした。



パークホテルの入口と室内 19時に近いのに、雲ひとつない青空が眩しい！

僕の部屋は広場に面しておらず、窓も小さくてほとんど外を眺められない密室に近い感じであった。ローテンプルク（ドイツ）の城壁内のホテルの時と同じで旧市街のホテルは古いので仕方がないし、今夜は運河まつりで遅くまで部屋に戻らないし、広場に面しているとうるさいかもしれないので、まあ、良しとした。部屋では例によって足湯をして英気を養い（TVでは「名探偵コナン」をやっていた）、その後ロビーに集合してマルクト広場での写真タイムを経て、近くのレストランに向かった。



ブルージュの鐘楼



州庁舎



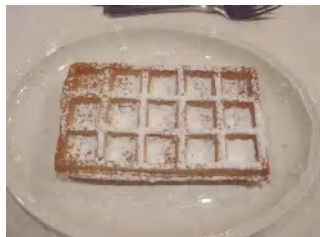
中世から動かない銅像



聖子の歌を知っていた森田さんと「ブルージュの鐘」の音を聴きながらピース
抜けるような青空に突き出ている鐘楼をはじめ、中世から動かないヤン・ブ
レーデルとピーテル・デ・コーニングの銅像、ポコポコとゆっくり走る馬車等、
あたかも中世にタイプスリップしたような、ゆったりとした気持ちいい満足感
を味わうことができた。「ブルージュの鐘」の総重量 27 トンのカリヨンは、計

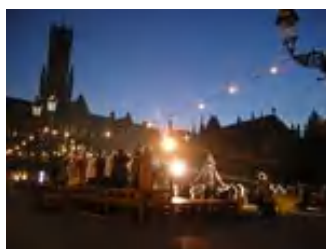
47 個を数え、その音色はヨーロッパ 1 とされる程の素晴らしい音を出すことで有名だというのが“Ding Dong Ding Dong”と快い音色で迎えてくれて、歌の通りの光景に心から感動することができた。

夕食はワートルズーイという鶏肉と野菜のクリームシチュー（薄味）のようなもので、デザートはワッフル！“朝食には蜜のついたワッフル”ということで、ブレックファーストでのワッフルを期待していたのだが、ディナー後のも、まいう〜であった。



ベルギーには 540 社ものビール醸造所があるという

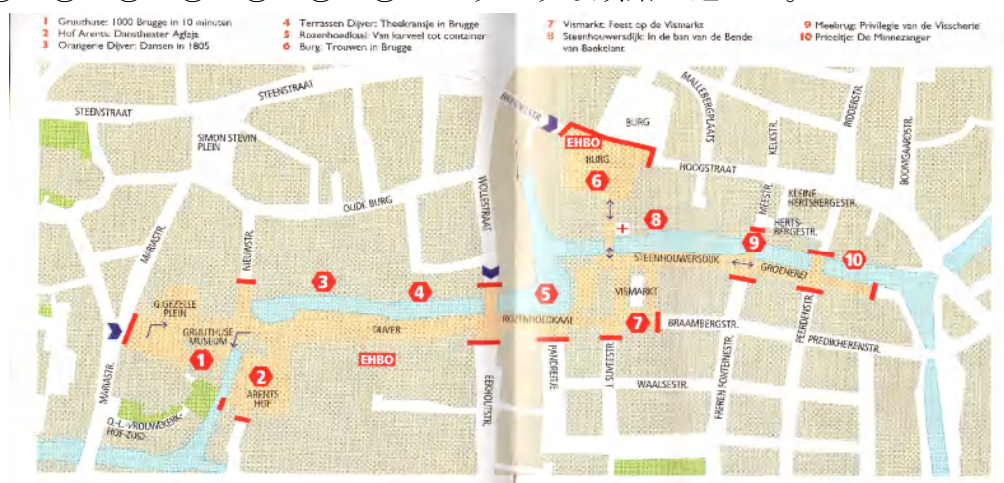
ブルグ広場に面した市庁舎



夕闇につつまれていくブルージュ

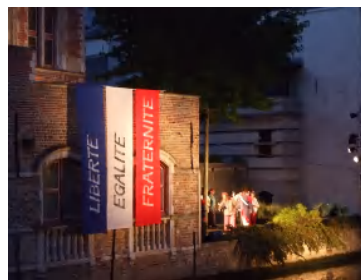
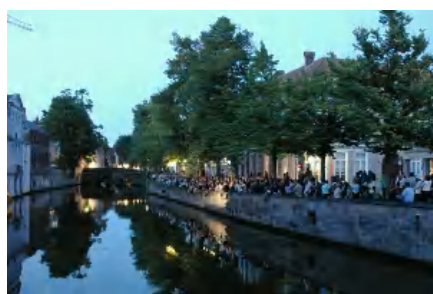
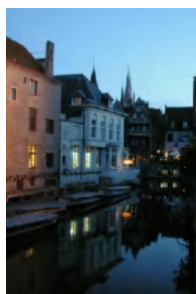
運河まつりのチケット

夕食後に（19 時前）いよいよ運河まつりへと出発した。ブルグ広場の入口から、人混みを押し分けるように入場し、運河沿いに行われるイベントを、下図の⑧→⑤→④→③→②→①→⑦というような順路で巡った。



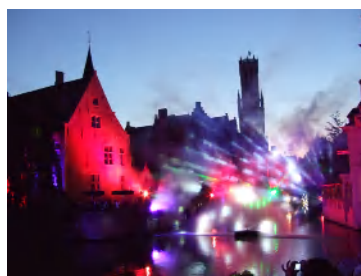
入口から運河を渡って左手を振り返ると、⑧の Baekelant の群衆の寸劇が行われているのが目に入った。角度が浅くてよくわからないうちに終わってしまったが、このようなイベントが 15 分間隔のインターバルで、運河沿いの 10 カ

所で繰り返されるという。次の⑤はとても混雑していたが、メインのイベント会場といった感じであった。



運河を渡って左手が⑧

2ユーロで購入したプログラムによると、⑤は Rosenhoedkaai(バラ色の帽子の埠頭?)と載っているが、何やらベルギーに関する戦争を含めた歴史の‘光のショー’といった感じのイベントであった。ドカ〜ン、ドカ〜ンという大砲のような音が発せられていたが、戦争か何かの光景を表しているようであった。



⑤は大混雑しており、背伸びして撮影したが、内容は今いち分からなかった



噴水のように左右から水が扇状に放射されて、そこに軍艦のような映像が映し出された



④のお茶会のイベント

④はブルージュのお茶会といったような感じで、中世の衣装を纏った人たちが乗った小舟や運河沿いのテラスで貴婦人がお茶している光景が見られた。は

はじめは中華風の、続いてモーツァルトの音楽が流れていた。

1805 年のダンスと銘打ったイベントが③である。対岸の建物では舞踏会が催され、こちら側でも種々のダンスが披露された。この時にデジカメがピントエラーの表示が出てしまい、以後、使用できなくなってしまった。ショック！！



「1805 年のダンス」

ジャンボマックス？

②は Aglaja のダンスシアターで、高校生くらいの男女のそれぞれのフラッグダンスが披露された。旗を振りながら踊る女の子たちは皆かわいらしく（デジカメの故障で写真がないのが残念）、男の子たちも笑顔を絶やさずに楽しそうに踊っていたが、白いタイツのモッコリが気になった。

①はレンガ造りの建物をスクリーンにして、ブルージュの 1000 の光景を映し出す 10 分間の野外シアターであった。あまり面白くなかった（それにオランダ語の語りも解らなかったので）、すぐに退散した。

11 時近くになり、そろそろ帰ろうと歩いていると、突然現れたジャンボマックス？（昔、ドリフの全員集合に出ていた）に驚かされてしまった。濱辺さん、伊藤さんと 3 人でお店を見ながら、ゆっくりと石畳の路を歩いてホテルに戻ると 11 時 15 分であった。

『運河まつり』はケバケバしい華やかさはなく、静かに盛り上がっているという感じであった。3 年に一度のこのイベントを満喫することができたことは、将に「真夏の夜の夢」を見たようであった。

8 月 16 日（土） 晴れ

8 時からの朝食を急いで済ませると、すぐに散歩に出かけた。運河まつりで遅くまで賑わった町の朝は、すれ違う人もほとんどなく、昨夜の人波が幻のように思えた。静かで幻想的ともいえる石畳の道を、一步一步踏みしめて歩いていくと、中世の空気を肌で味わうことができたような気分になった。

幸い、朝早くから開いている店があって、壊れてしまったデジカメの代品として、使い捨てカメラを買うことができた。しかし、デジカメの故障は「ブルージュの鐘」の詞のように、“心のフォトグラフ”を写しなさいという神の啓示なのかもしれない、と自身に言い聞かせて運河沿いの道を進んで行った。ほと

んど人と出会わず、シャッターを頼むにも苦勞してしまうくらいであった。



昨夜の喧噪がウソのような静けさの町は、中世にタイムスリップしたかのよう！

8時40分、鐘が「喜びの歌」を奏でたが、美しい音色は疲れた心の隅々まで響き渡り、中世というよりもおとぎの国にしているような錯覚に陥ってしまった。束の間の素晴らしく清々しい朝の散歩となった。

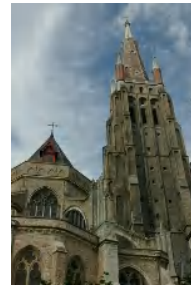
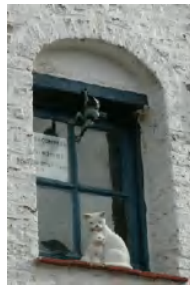


「ブルージュの鐘」は心地よく鳴り響いた！

9時少し前にホテルに戻ると、現地ガイドの古賀リリ子さんによるブルージュ観光がスタートした。ブルージュは現地語でブルッヘと言い‘橋’を意味し、町を縦横に流れる運河には50以上の美しい橋がかかっているという。人口は12万5千人だが、旧市街には約3万人で、城壁の外に住んでいる人の方が多いという話であった。町なかのパーキングは2時間まで無料だが、それを過ぎると40～50ユーロの罰金が課せられると続けられた。また、今年は7月末から8月初めにかけて30℃にもなり、ブルージュとしてはかなり暑かったそうだ。

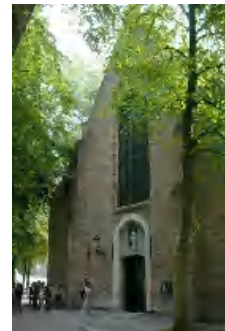
朝食後に出かけた際にはまだ少ししかなかったが、ホテルの前のザンド広場には衣類やカバン、食料品等のマーケットが所せましと店開きし始めていた。それに伴って、今まで眠っていた町が急に目覚めたように、たくさんの観光客が闊歩し始めだした。

1か月の家賃が600～700ユーロくらいという白い洒落たアパートを見ながら、1188年に建立され、現在は郊外に移転してしまったという旧聖ヨハネ病院の中庭を歩いてビジターセンターを抜けて進んでいくと、右手に聖母教会の尖塔が目に入った。



白いアパートは洒落た造りで、ネコもいた？ 教会の尖塔はブルージュに相応しい

中庭を抜けて右折し、中世には最も栄えていたカトリック通り（最近ではチョコレート屋さんが多いという）に出て、シュケルブックという老舗の横を通過して運河にかかる橋を渡るとペギン会修道院に到着した。ここは1245年に設立され、戦争未亡人や女性のための保護施設（駆け込み寺のような・・・）であったが、現在はペギン会ではなく、ベネディクト派の修道院になっていて自給自足の生活が営まれているという。1958年にオードリー・ヘップバーン主演の「尼僧物語」のロケが行われたことで有名という説明が付け加えられた。礼拝堂内には聖エリザベスがキリストに膝まづく像が置かれていた。



落ち着いた雰囲気のパギン会修道院

次に、修道院のすぐ裏手にある、愛の湖と呼ばれる入り江のような所を訪れた。中世の頃は外の濠とつながっていたので、船着場として使用されていたという。しかし、元々は貯水池として使われてきたとも言われている。



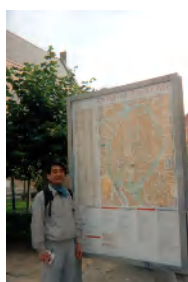
愛の湖はホッとすると安らぎが感じられた

馬の水飲み場

元来、ブルージュはイギリスから羊毛を仕入れた毛織物産業が盛んであったが、その後イギリスの織物が台頭してきたために衰退してしまい、毛織物からレースに変わったということで、19世紀～20世紀初頭のアンティークレースは

高価であるとのことであった。実際、アンティークレースの小さなブローチは日本円で1万円くらいしていた。

馬車用の馬の水飲み場やブルージュの地図の看板を見ながら、先ほど見た聖母教会の内部に入った。中にはミケランジェロ作の聖母子像が鎮座していたが、キリストを裸で作ってしまったために、イタリアの教会ではNGとなっており、ここに持って来られたということだ。



ブルージュの地図



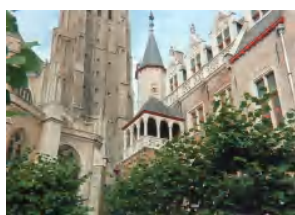
聖母教会の内部



聖ボニファース橋

ブルージュの運河にかかる橋で一番小さい聖ボニファース橋を渡ると、ビールを薬用として販売して大金持ちになったというグルートフード一族の邸宅の庭から、彼らの邸と教会とをつなげる渡り橋が見られた。中世の生活が宗教と密接に関わっていたことが窺われる光景であった。

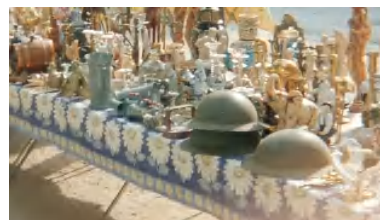
運河沿いの歩道には蚤の市が開かれており、骨董品をはじめお皿や日用雑貨類が売られていた。古賀さんによるとドイツ軍のヘルメット等も売られていることがあるという話であったが、確かにブルギー軍？のヘルメットが売られていた。



教会への渡り廊下



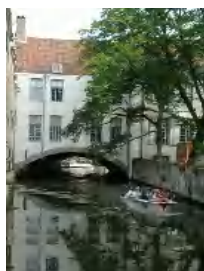
運河沿い蚤の市ではヘルメットも売られていた



運河まつりのメイン会場と思われ、昨夜はごった返していた所では、ちょうど結婚式が行われたようで、新郎新婦に出会った。20年以上前、柳川の川下りですれ違った舟に花嫁さんが乗っていたのに感動したことを思い出してしまった。また、昨夜はコンサートが行われていたブルグ広場も閑散としており、十字軍がコンスタンティノーブルから持ち帰った聖地の遺物が納められているという聖血礼拝堂も厳かに見ることができた。

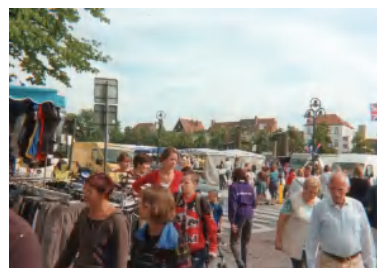
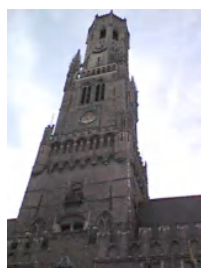
10時20分にマルクト広場に戻り、11時まで自由時間となった。僕は真つ先に鐘楼に上ろうと走ったが、長〜い行列ができていて、366段の階段を登る時間が無くて、泣く泣く登頂を断念した！ローテンブルクの市庁舎の時のように、

歴史ある町を眼下に眺めることはできなかった。仕方ないので値切りに値切って絵を買ったり、レース店を見て回ったりした。



花嫁が隠れてしまったが… 運河の小舟も Ding Dong ♪～ ブルグ広場と聖血礼拝堂

古賀さんは高校生の時に剣道をやっていたことがきっかけで、大学時代にベルギー人の夫（パスカルさん）と知り合って結婚され、こちらに来て14年になるという。パスカルさんは剣道の師範 7 段という達人で、ベルギーを中心に、ヨーロッパ各地においてボランティアで剣道を指導しているという。森田健作に憧れて僕も昔は竹刀を握ったことがあり、一応は有段者であることを話すと、こちらでは中々相手がいないので、剣道着等はいくつもあるので、身一つで遊びに来てくださいとお誘いを受けてしまった！ 彼女はまた、「地球の歩き方」に“ベルギーのお菓子歳時記”を寄稿しているが、ちょっと華奢と思われる感じなので、剣道というよりお菓子の方が似合っているように思えた。



派手なレース店が！ 古賀さんと 登れなくて残念 ザンド広場の青空市

ザンド広場の市は毎週土曜の午前にものみ開かれるということであるが、混み合う人のかき分けてパークホテルに戻り、古賀さんともお別れして11時半にブルージュを出発した。もう少し滞在して鐘楼の上にも登りたかったし、中世の気分を味わいたかった。後ろ髪を引かれる思いでブルージュを後にした。

僕にとって、ブルージュは今回の旅行のメインであり、思い出が強かったので、この町についての知見を少し記しておこう。

ベルギーの首都ブリュッセルの西約 100km、西フランドル州の州都であるブルージュは 11 世紀に北海と運河で直接結ばれ、12・13 世紀にはヨーロッパ第一の貿易港となって、中世ヨーロッパの商業の中心として繁栄した。しかし、15 世紀末にブルゴーニュ侯家の時代が終焉を迎え、北海とを結ぶ水路も沈泥の

ため浅くなって海上交通が閉ざされ、ブルージュは歴史の表舞台から取り残されていく。廃墟に近い、将に「死都」となり、実際に旧市街地は空き家だらけで、建物は軒並み幽霊屋敷のようになってしまったという。その後、奇跡的に二つの大戦の戦火も逃れ、ブルージュは中世を封印したまま現在に至り、おとぎの国の雰囲気呈しているのだ。

12 時 30 分になると、バスの中では溝渕さんからアントワープの説明が始まった。ベルギー第 2 の都市で人口 50 万、「フランダースの犬」で有名であり、ノートルダム大聖堂にはネロ少年の憧れだったルーベンスの絵があることでも知られている。そして、溝渕さんによる「フランダースの犬」の朗読が行われた。適度な感情がこもった、とても上手な朗読であった。あまりしつとりと読みすぎると涙を流してしまう方もいるそうで、彼女はとても難しいと照れていたが、少ししんみりしてしまう感じのちょうどいい抑揚であった (good job!)。

「フランダースの犬」は大正時代に日本に紹介された物語で、英国の女性作家がアントワープに住んだ経験をもとに書いたという。イギリスや日本で出版されたが、ベルギーでは本になっていなかったのも、最近までほとんど知られていなかったようだ。また、悲惨な結末とともに、日本では 6 歳と設定されているネロ少年は実際のところ 15 歳であり、分別がつく年齢であったにもかかわらず、何故たくましく生きていこうとしなかったのか？ という冷めた見方もある。こちらでは受け入れられなかったということである。

12 時 55 分になって、牛肉のビール煮のランチとなった。



レストランの近くには海洋博物館（ステーン城）が見られた

14 時 20 分に昼食を終えると、右手には 10 世紀から 16 世紀まで使用された要塞の一部で、現在は海洋博物館となっているステーン城が見られた。そこから 2～3 分でノートルダム大聖堂に到着した。123m の高さの塔を有するこの大聖堂は、1352 年から 169 年かけて建造されたオランダ・ベルギー最大のゴシック教会ということである。土曜日の公開は 15 時までということで、ブルージュ観光が早めに切り上げられたようだ。内部はルーベンスの最高傑作といわれる「キリストの昇架」「キリストの降架」「聖母被昇天」が掲げられ、厳かな雰囲気を呈していた。

1610～1611 年に描かれた「キリストの昇架」は左が善、右は悪を表している。1611～1614 年の「キリストの降架」は最も優美な絵といわれており、赤色の衣

装がヨハネ、青はマリアということだ。中央の祭壇の奥に掲げられた「聖母被昇天」ではマリアが天使に運ばれているが、ルーベンスの 2000 点以上の作品のうちマリアは 10 点描かれているという。



「キリストの昇架」 「キリストの降架」 「聖母被昇天」 ルーベンスの像

以前は大聖堂の墓地として使われていたフルン広場ではコンサートが開かれていて、昼間から大そう賑わっており、大聖堂をバックにルーベンスの像が立っていた。画家の印であるパレットと優秀な外交官の印である剣を持った姿は印象的であった。

アントワープとは手を投げるという意味があり、これはシュヘルド川で猛威をふるっていた、旅人から通行税を取る巨人の手を切り取って投げたブラボーという古代兵士の伝説から名付けられたという。マルクト広場には巨人の手を持って投げようとしている像があり、噴水もあって賑わっていた。近くにはネロとパトラッシュの記念石 (presented by TOYOTA) があつたが、その上にはしっかり外人が座っていた。

しばらく自由時間となり、伊藤さん・濱辺さんと‘手の形のクッキー’やチョコレートを買い喰いし、カフェで休憩した。



22 名の集合写真ー僕が中心！

ブラボーの像

大聖堂の塔をバックに

17 時 10 分にマルク広場にあるルネッサンス様式の市庁舎の前で全員の集合写真を撮影した後に、シュヘルド川に面した駐車場に向かった。

ブリュッセルに向かうバスの中では、TD からベルギーに関する説明が種々あ

った。ベルギーではオランダ語に近いフラマン語、フランス語に近いワロン語が主な言語となっており、現在、ブリュッセルではワロン語が少し強い傾向にある。小便小僧のジュリアン君とオードリー・ヘップバーンがブリュッセル出身の2大名人である。また、ベルギー王室ご用達のチョコレートは6社あり、1)1920年代にドラップスという人が創立したゴディバ 2)元々は板チョコメーカーであったガレ 3)1857年創業で、菓と菓子を作っていたジャン・ノイハウスが1912年にナッツ類をチョコに入れたのが始まりのノイハウス 4)コートドール 5)メリー 6)ビタメールということであった。

さらに、ベルギー名物ワッフルには大きく2種類あって、ゴリゴリして硬めでザラメ砂糖入りのリエージュワッフルとふわふわしたブリュッセルワッフルで、こちらはイチゴや生クリーム、アイスクリーム等をトッピングすることが多いという…。

ブリュッセルが近付くと、右手にアトミウムという1958年のブリュッセル万博を記念して造られたモニュメントが目に入った。



アトミウム



「北京」での食事風景



市内に入り、18時20分から「北京」という店で中華料理の夕食となった。

19時50分にホテルブルームに到着したが、改装されたばかりだそうで、広い室内はきれいで二重丸であった。就寝前に、旅友の大岡さんや平山さんをはじめ10枚以上の絵ハガキを書いた。

8月17日（日） 曇り、一時雨

7時にモーニングコールがあり、9時の出発となった。隣室の小林さんから“昨夜、歌を歌ってらした？”と聞かれてが、絵ハガキを書きながら、無意識のうちに「ブルージュの鐘」等を口ずさんでいたと思われる(^_^;)。それにしてもこのような立派なホテルでも、壁って薄いのねエ～。

北海道出身という、少し髪がうすい大作（おおさく）さんという日本人ガイドに連れられて、街の中心部へと向かった。ドンキホーテの像があるスペイン広場を抜け、悩める作曲家バルトークの像を見ながらグランプラスに至った。グランプラスとはフランス語で大きな広場という意味であるが、確かに、約110m×70mもあり、かのビクトル・ユーゴーをして「世界で最も美しい広場」と言わしめたそうだ。

尖塔が鉛色の空に白く突き出ている印象的な市庁舎と、その対面の歴史博物館、ブラバン公爵の館、ギルドハウス等によって囲まれた広場には、豪華なフラワーカーペットが敷き詰められていた。



市庁舎とグランプラスのフラワーカーペット

ベコニアの花で飾られたフラワーカーペットは、1年おきに3日間開催されるが、本日が最終日ということで花の勢いはちょっと弱まっているように思われた。しかしながら、「花は盛りに、月はくまなきをのみ、見るものかは」と兼好法師が書いたように、花びらには成熟した美しさが漂っていて、それぞれが個を主張するような段階から互いに融和するようなステージに入っており、より趣き深いように感じられた。

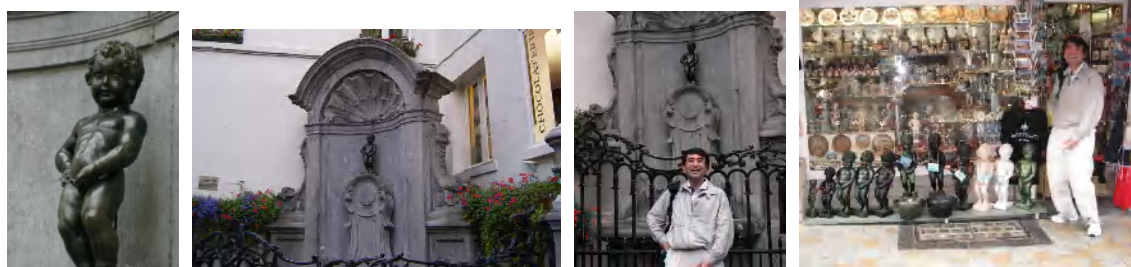


フラワーカーペットを市庁舎の2階から眺めました！

フラワーカーペットはルイ13世の時代のタペストリー職人の作ったモチーフをもとに作られ、現在でもその流れが受け継がれているという。市庁舎内には歴代のフラワーカーペットのモデルになったカーペットが飾られていた。正面の歴史博物館の小径を挟んだ右側のゼラニウムが飾られている建物の2階には、一時ビクトル・ユーゴーが住んでいたということである。そのビルの右端の1階にはゴディバの本店が入っているが、昔は画家の同業組合があったということである。すなわちギルドハウスの名残であるが、建物には種々のマークが付けられており、例えば、天使が矢を持ったマークのある建物は油屋で、貝殻マークは建具屋といったような感じになっていた。

続いて、ブリュッセルの最長老市民である小便小僧（ジュリアン君）に向か

った。敵軍に包囲されて爆弾でブリュッセルの城壁が吹き飛ばされそうになった時、ブラバン公の 6 歳のジュリアン王子がおしっこをかけて導火線の火を消し、味方を勝利に導いたという‘伝説’から 1619 年に作製されたという。フランス軍によって持ち去られてしまったことがあったが、ブリュッセル市民の怒りを買ってデモが起きてしまったために、ルネッサンス風の豪華な衣装を着せて返還されたという。以来、世界中から衣裳が贈られ続け、ジュリアン君は世界一の衣装持ちということである。因みに、アメリカからはエルビス・プレスリー風の衣装で、日本からは最も高価な鎧兜の衣装が贈られたそうだ。



小便小僧は小さかったが、名物ということで混雑していた

小便小僧を訪れたことで、人魚姫（コペンハーゲン）、ローレライ（ドイツ）とヨーロッパ三大ガッカリを制したことになる訳だが、左手で握り、ちょっと後ろに傾いた姿勢はとても写実的で、3 つの中では最高点をあげることにします～（でも浜松町駅ホームにある小便小僧の方が大きいような気がする…）。

その後は右回りに進んで、カカオ・チョコレート博物館の前を通ってグランプラスに戻り、ギャルリー・サン・チュベール（200mもあるヨーロッパで最も古い（1847 年に完成）アーケード）を案内され、再びグランプラスの市庁舎の隣にあるセルクラースの像（この像に触れると幸せになれるというが、建物が修復中であった）を見てからムール貝の昼食となった。



ムール貝

カカオ・チョコレート博物館と内部での実演・チョコのドレス

食後は自由時間となり、濱辺さん・伊藤さんと、まずはカカオ・チョコレート博物館を見学した。カカオの甘い香りが漂う中、チョコレート職人の説明を聞きながら実演を見た。チョコは 45℃、ホワイトチョコは 48℃が融点とか、溶けたチョコを型に流し込んで脱気泡し、40 分位放置すると固まる等の説明があ

った。

レオニダスでチョコストロベリーを食べてから、ホテルノボテルの脇を抜けて坂道を進み、王宮へと歩いて行った。上り坂は結構きつく、伊藤さんから足が痛いのでタイムとのリクエストがあつて、しばし休憩しての散歩となった。



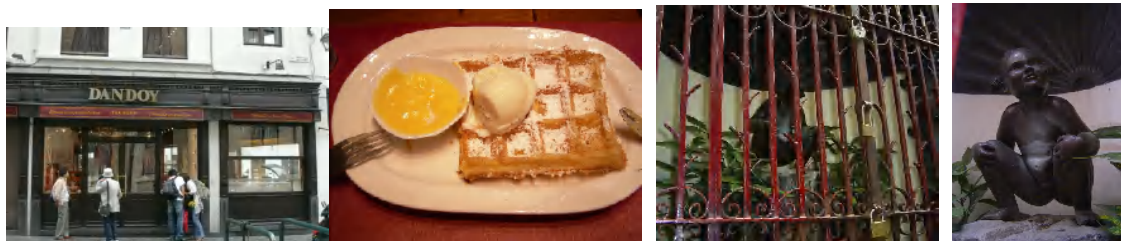
ゴディバの本店

ロワイヤル広場から見る市庁舎の尖塔 王宮

一般公開は夏だけということもあつてか、王宮は思ったよりも混雑していた。説明も分からず、内部も撮影禁止となっていたので、何となく周っただけになってしまった。王宮に行くくらいなら買い物していた方がいい、との岩田先生の話の思い出し、ちょっと可笑しかった。

16 時 30 分にグランプラスに戻ると、ものすごい混雑となっていた。たくさん観光客が、最後のフラワーカーペットを楽しんでいるようであった。

人混みをかき分けてワッフルの有名店ダンドアにたどり着くと、2 階でアイスクリームとアボガドのベルギーワッフル（6.6 ユーロ）を注文した。アイスクリームの甘さとフワとしたワッフルの軽い歯ごたえは疲れた身体に活力を与えてくれ、ちょっぴり苦味にあるアボガトクリームは食欲をそそってくれて、とてもまいう〜であった。実は何かわからず好奇心の赴くままにこのワッフルを頼んだのだが、正解であった！この店ではおみやげ用にシナモンや生姜入りのクッキーであるスペキュロスを購入した。



有名なワッフル店ダンドワ

小便少女には鉄柵が… ちょっと卑猥

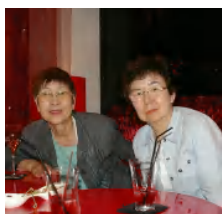
少しゆっくりした休憩の後、アーケードを通して小便少女を見に行ったが、こちらは観光客も少なく、何といっても鉄柵がかけられているのにはビックリした。小便小僧と比べると何と可哀そうな！

イロ・サクレ地区（食べ物横丁）はたくさんのレストランが並んで活気があった。ぼったくりの店が多いということで、大作さんお勧めのシェ・レオンにしたが、われわれのツアーのほとんどがこの店でのディナーとなったようだ。



伊藤さん、濱辺さんとシェ・レオンでディナー

食後の散歩を兼ねて、少し迷いながら？ゆっくりとホテルに戻ると、ちょうど 22 時であった。森田さんからホテルのバーで打ち上げをやっているのだから来てくださーいとのことで、すぐに参加した。旅の思い出、これからの旅の予定等について話が弾み、あっという間の楽しいひとときとなった。



打ち上げには 11 名が参加しました

8 月 18 日（月） 曇り

7 時 30 分のモーニングコールの後、すぐに朝食を済ませると、ホテル近くのスーパーでちょっとしたお菓子を購入して出発を待った。

ブリュッセル空港では機内でのおやつ用にノイハウスのトリュフを購入し、BA393 便に乗り込んだ。隣席のベルギー人女性は地質学者で、カナダに 10 年近く住み、昨年は日本も訪れたとかで、富士山の周りの温泉はとても良かった等と話していた。このところ、海外に出るとよく話しかけられるようになったが、一体どうしたのだろう（おじさんになったのかなあ…）。

ロンドン発 BA5 便では、「ドリルビット・テラー」「スパイダーマン」を見て過ごしたが、何となく眠れず退屈であった。日産のカルロス・ゴーン社長に似たパーサー（Mr.Angelo）と仲良くなって話が弾み、帰りにはお土産としてシャンパンやワインをたくさ〜ん戴いてしまった。ラッキー！



Angelo の V サインは巨大だね！

8月19日（火） 晴れ

9時30分に着陸すると、すでに29℃ということであった。カルーセルでスーツケースを受け取り、皆さんに挨拶した後に、おみやげのチョコレートは溶けてないかなあ？少し心配しながら11時39分発スカイライナー6号で帰路についた。

将にあっという間の7日間、束の間の自由な時間、夢のようなオランダ・ベルギー旅行であった。特にベルギーには、是非とももう一度行かなければと感じた。

あとがき

素敵なメンバーとTDに恵まれ、素晴らしいオランダ・ベルギー旅行を体験することができた。22名の参加者中、僕以外はすべて女性というのが凄〜い(^_^)v。それも大学4年生から81歳までの幅広い年齢層に亘っているのも驚いた。また、今回は北京五輪が開催されている最中であり、朝、溝渕さんからの日本人選手の活躍報告には一喜一憂したが（北島康介は100に続いて200mも金、浜口京子は銅、星野ジャパンは…）、旅の思い出の1ページとなって、オリンピックの度に思い出されることだろう。

クソ暑い日本を脱出して一足早く爽やかな初秋の風に吹かれることができた今回の旅行は、また、名画との出会いの旅でもあった。ガラス越しでなく、間近で堪能することができた数々の名画はどれも迫力満点で、胸に迫るものがあった。何より「真珠の耳飾りの少女」を誰もいなくなった部屋で独占して見ることは（わずか1分ほどの時間であったが）、特筆すべきことであり、将に生きていてよかった！と思われる印象深いものとなった。

デジカメが壊れてしまったことは大ショックであり、この旅行記を作成するにあたり支障が生じてしまったが、伊藤さんが予備用のデジカメを貸してくださったお陰で何とか乗り切ることができた。スペシャルサンクスですね<(_)_>。また、いち早くオンライン・アルバムに写真をアップしてくださった湯川さん（引用させていただきました）、いろいろお世話になった濱辺さんをはじめ皆さんすべてに、この場を借りて感謝いたします。

26年間想っていた“ブルージュ”を訪れ、中世の雰囲気の中に身を置き、あたかも‘おとぎの国’にいるような気分になることができたことも大きな幸せである。日本と異なって文化や伝統に誇りを持ち、古くからの風景や環境を大切に作るヨーロッパのよき慣習の一つがブルージュと言えるだろう。今回の旅

の命題である‘ブルージュの鐘の音’は、疲れた僕の心に沁みいるように“Ding Dong Ding Dong”と鳴り響いてくれた。

また何より、ブルージュの運河まつりとブリュッセルのフラワーカーペットというイベントを、6年に一度しかないタイミングで両方見れたのはすごい！

松田聖子の歌が、今回のオランダ・ベルギー旅行につながった訳だが、聖子と言えば「セイシエルの夕日」というのも好きな歌のひとつである。セイシエルにもそのうち行ってみたいなあ(^.^)/~~~

「ブルージュの鐘」 作詞：松本隆 作曲：細野晴臣

運河沿いの可愛らしいホテル 向こう岸は古い教会ね
朝食には蜜のついたワッフル 一人なのよ 春のバケーション
Happiness 束の間の自由な時間

きれいな鐘の音 Ding Dong Ding Dong 霧が晴れた朝
広場の子鳩も Ding Dong Ding Dong 青空に舞い上がるのよ
心のフォトグラフ映して

ベレー帽のハンサムなおじさま 橋の上で 景色描いてるわ
市場までの道を尋ねたけど だめね 英語 まるで通じない
身振り手振りなの 自由な旅ね

きれいな鐘の音 Ding Dong Ding Dong 石畳の道
運河の小舟も Ding Dong Ding Dong ゆるやかに流れてゆくわ
心のフォトグラフ映して

いつか本のグラビアで見てから 憧れてた 古い町並みよ
中世から動かない銅像 馬車に乗って 町を巡るのよ
Happiness 束の間の自由な時間